

高齢者の口底にみられた特異な 組織像を呈した血管腫の1例

板垣光信 武田泰典 鈴木鍾美

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座

(主任：鈴木鍾美教授)

〔受付：1988年12月19日〕

抄録：82歳の女性の口底部に生じた血管腫の1例を報告した。臨床的には境界明瞭で、可動性の弾性硬の腫瘤であり、被覆粘膜は正常色を呈していたことから、唾液腺由来の良性腫瘍あるいは皮様嚢胞との鑑別は困難であった。組織学的には、海綿状血管腫であり、周囲は硝子化を呈する厚い線維性結合組織層で囲まれており、さらに腫瘍周縁には線維化傾向を呈する肉芽組織の増生が種々の程度にみられた。したがって、本例は非常に長期の経過を経たものと推測された。

Key words : hemangioma, mouth floor, differential diagnosis.

はじめに

血管腫は口腔領域の良性腫瘍として発生頻度の高いものの一つであり、おもに粘膜部に生ずるが、咬筋部や耳下腺にもみられることもあり、また、まれには顎骨内にも生ずる¹⁾。軟部組織での好発部位は舌、口唇、頬粘膜であるが、歯肉、口蓋、口底部などにもみられる。発現年齢は各年代にわたるが、先天的な組織異常として生下時ないし幼児から認められることも少なくない。軟部組織に生じた血管腫は、かたさは柔軟であり、粘膜表面からの位置や血管の性状によって左右されるが、色調は一般に赤紫色を呈することから、臨床的に診断も比較的容易である。

今回、筆者らは高齢者の口底部に生じた血管腫で、臨床的には唾液腺腫瘍あるいは類皮嚢胞と思われた1例を経験したので、その概要を報

告する。

症 例

患者は82歳の女性で、口底部の腫瘤を主訴として来院。全身状態は良好であり、特記すべき既往疾患もなかった。約3年前より口底部右側に弾性硬の境界明瞭な腫瘤を自覚していたが、無症状のために放置していた。しかし、数カ月前より、この部に総義歯の床縁があたるようになってきた。腫瘤は境界明瞭で、健常な粘膜によって覆われていた (Fig. 1)。また、可動性で、圧痛はなく、波動も触知されなかった。舌下小丘部からの唾液の分泌は正常であった。咬合法によるレントゲン撮影では、腫瘤は透過像を呈したが、一部に半米粒大の不透過巣が認められた。唾液腺由来の良性腫瘍あるいは舌下型の類皮嚢胞の臨床診断のもとに、局所麻酔下で摘出手術を行った。腫瘤は全体にわたってよく

A case of hemangioma with interesting histologic finding in the mouth floor of a aged patient.

Mitsunobu ITAGAKI, Yasunori TAKEDA and Atsumi SUZUKI

(Department of Oral Pathology, School of Dentistry, Iwate Medical University, Morioka 020)

岩手県盛岡市内丸19-1 (〒020)

Dent. J. Iwate Med. Univ. 14 : 43-46, 1989



Fig.1 Well circumscribed and spherical mass covered with normal mucosa in the mouth floor.

被包化されており、周囲との癒着はなく、また、唾液腺や排泄管との関連も認められなかった。摘出した腫瘍は $20 \times 20 \times 25$ mmの大きさであった。二分割すると、周縁部は厚い線維性の組織からなり、その内側は黒褐色で柔らかい凝血塊様の内容物で満たされていた。

病理組織学的には、腫瘍は線維性結合組織の厚い層に囲まれた海綿状血管腫であった (Figs. 2 A, B)。線維性結合組織層の大部分は硝子化を呈し、そのところどころに種々の程度に拡張した毛細血管が散見された。また、一部には石灰化巣もみられた (Fig. 2 A, arrow)。海綿状血管腫の部分は、一層の内皮細胞におおわれた著しく拡張した毛細血管の集合からなり、内腔には赤血球が充満していた (Fig. 2 B)。また、ところどころに血栓が形成されており、それが周縁部より徐々に器質化されている所見もみられた。線維性結合組織層と海綿状血管腫との境界部には線維化傾向を呈する肉芽組織、線維素の析出、硝子変性などがみられた (Figs. 2 C, D)。また、ところによっては血管成分に富んだ肉芽組織が増生し、毛細血管腫に類似する組織像を呈する部分もあった。

考 察

口腔領域の血管腫の好発部位について、松村ら²⁾は96例を観察し、口唇、頬部、舌に生ずるものがほとんどであり、その他、歯肉と口蓋にわずかにみられたが、口底部に生じたものはなかったと報告している。また、橋本ら³⁾は155例について、舌、口唇、頬部に生じたものが80%以上を占めており、口底部に生じたものはわずか3例(1.9%)であったと報告している。したがって、今回報告した症例のように、口底部に血管腫をみることは比較的まれといえるであろう。口腔領域に生ずる血管腫を組織型別にみると、60~70%が海綿状血管腫であるといわれており^{1~3)}、今回の報告例も海綿状血管腫であった。血管腫の発症年齢について、生下時にみられるものが多く、過半数が20歳未満のようである^{2,3)}。また、40~50歳代にもやや多いといわれている^{3,4)}。本例のように、79歳で自覚し、80歳を過ぎてから摘出された症例はまれである。口腔粘膜下に生ずる血管腫の多くは、臨床的には境界不明瞭な赤紫色の隆起性病変としてみられる⁵⁾。今回の報告例では、可動性で弾性硬を呈する境界明瞭な腫瘤として粘膜下に位置し、粘膜の色調に著変は認められなかった。

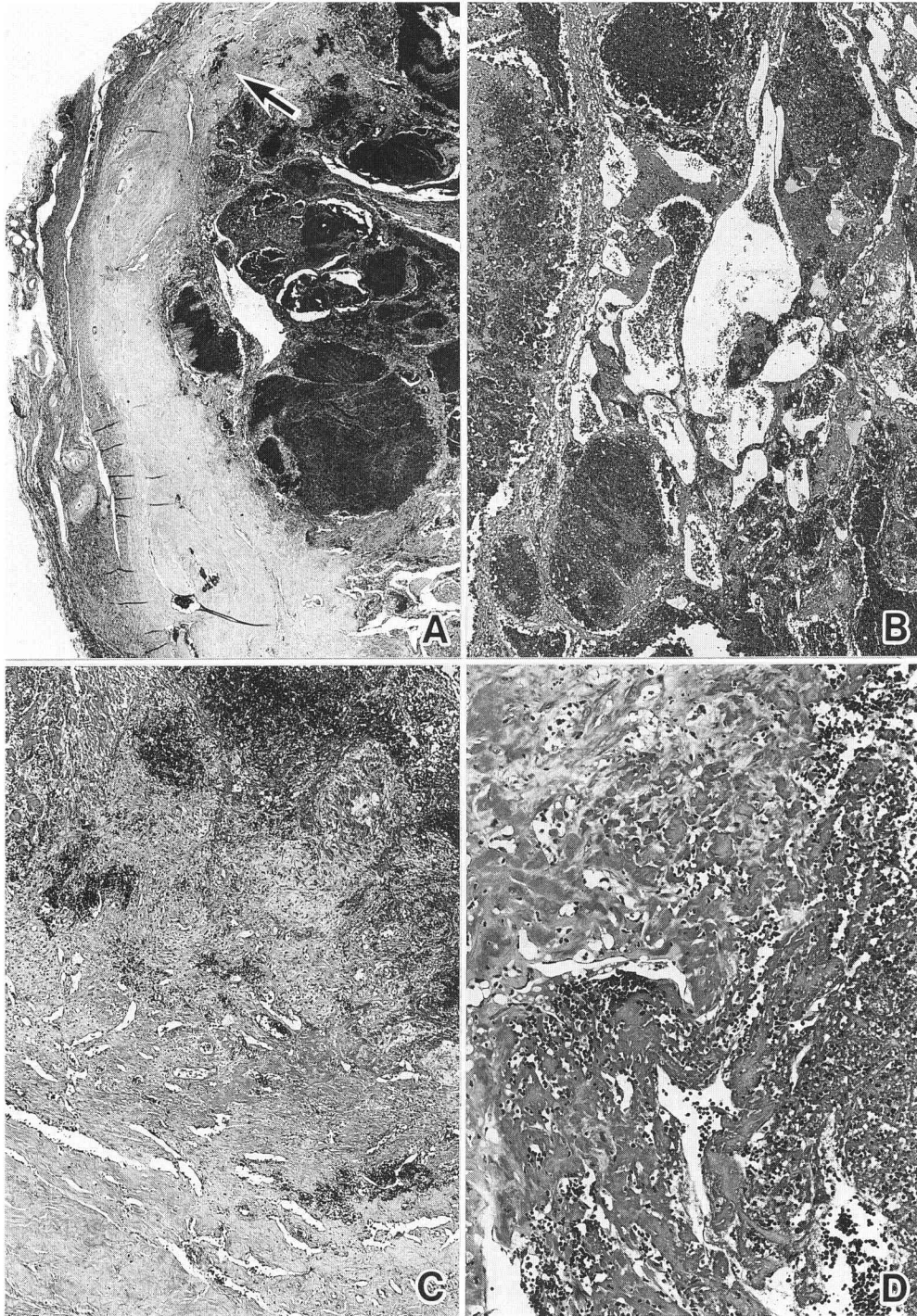


Fig.2 Histopathologically, cavernous hemangioma, surrounded by a thick layer of fibrous connective tissue with hyalinization (A, B). Calcification is seen in fibrous connective tissue layer (A, arrow). Tumor is replaced by granulation tissue with fibrosis (C). Capillary hemangioma-like proliferation of capillary and marked hyalinization of stroma (D).

したがって、臨床的には、唾液腺由来の良性腫瘍あるいは皮様嚢胞が考えられた。また、組織学的には、硝子化を呈する厚い線維性結合組織に被包され、さらに線維化傾向を呈する肉芽組織が周縁より中央部に向かって種々の程度に増生している所見がみられた。このような所見からみると、血管腫の多くは真の腫瘍というよりは発育奇形的なもので、ある程度まで増大したものが、長期の経過とともに徐々に器質化されることもあり得るものと考えられた。しかしながら、本例のような血管腫例の報告はない。

ま と め

82歳の女性の口底部に生じた血管腫の1例を報告した。臨床的には境界明瞭で、可動性の弾性硬の腫瘤であり、被覆粘膜は正常色を呈したことから、唾液腺由来の良性腫瘍あるいは皮様嚢胞との鑑別は困難であった。組織学的には、海綿状血管腫であり、周囲は硝子化を呈する厚い線維性結合組織層で囲まれており、さらに、腫瘍周縁には線維化傾向を呈する肉芽組織の増生が種々の程度にみられた。したがって、本例は非常に長期の経過を経たものと推測された。

Abstract : Hemangioma of the oral soft tissue appears as a flat or raised lesion of the mucosa, usually deep red or bluish red and seldom well circumscribed. The most common sites of occurrence are the lip, tongue and buccal mucosa. The present paper reports a rare case of hemangioma of the oral soft tissue. The patient was an 82-year-old female with a tumor-like mass in the mouth floor. Intra-oral examination revealed a well circumscribed spherical mass the size of a thumb tip with an elastic but hard consistency in the mouth floor. The appearance of the covering mucosa was normal. Upon clinical diagnosis a benign salivary gland tumor or dermoid cyst was suspected. Histopathologically, the lesion was a cavernous hemangioma surrounded by a very thick layer of fibrous connective tissue with hyalinization. The peripheral area of the tumor was replaced by capillary-rich granulation tissue.

文 献

- 1) 石川悟朗：口腔病理学Ⅱ，改訂版，永末書店，京都，572-581頁，1982.
- 2) 松村智弘，菅原利夫，細田 超，中村正之，藤田訓也，宮崎 正，川勝賢作：血管腫患者の統計的観察，口科誌，22:476-481，1973.
- 3) 橋本賢二，塩田重利，向井 洋，小池正夫，朔敬：最近の10年間における血管腫の臨床統計的観察，日口外誌，23 : 680-688，1977.
- 4) Shklar, G. : Vascular tumors of the mouth and jaws. *Oral Surg.* 19 : 335-342, 1965.
- 5) Shafer, W.G., Hine, M.K. and Levy, B.M. : A textbook of oral pathology, 4th ed., W.B. Saunders, Philadelphia, pp. 154-157, 1983.